

福岡県田川市香春町教育委員会宛 香春町調査報告

高田重孝

880・0035 宮崎市下北方町横小路 5886・3

☎0985・25・5467 Fax0985・22・3628 携帯 090・5933・4972

Email shige705seiko214@outlook.jp.

秋月、長生寺、大涼寺、調査報告

4月3日、日曜日、桜花曇り、秋月は桜が満開で桜の馬場は花見客で大混雑でした。

秋月の長生寺、大涼寺の調査に伺いました。

秋月郷土館・館長の加峰（かぶ）満館長の御案内で、長生寺を調査いたしました。

長生寺

昨年10月、全国隠れキリシタン大会探訪の折、長生寺は訪れましたが、本堂には入らずに、また、裏山の興膳膳入の墓も、神山道子さんと僕だけが登って見ただけでした。

今回、改めて写真をきちんと撮りました。加峰館長が長生寺の門徒（信徒）代表をされている関係で、今回本堂に安置されている、興膳善入木像、位牌、新しい木像、石碑の拓本の写真、興膳善入が使用していた茶碗などを、記録してきました。写真同封いたします。

興膳善入が使用していた茶碗は、昭和36～38年頃、興膳家の方々が興膳膳入の墓を掘り返した際に、色々とお棺の中から出てきた物を各自が分配されたそうです。その後行方不明になっていたものを、興膳家の方が京都の古物商から買いもどされて、長生寺に納めた茶碗であるとのこと。墓を開いたときにお棺の中から何が出てきたかの記録は残っていないとの事でした。興膳善入の遺骨は結構しっかり残っていたと聞いているとのこと、その時の写真は取っていないとの事でした。加峰館長は、いつか善入のお棺を開いて詳しく調べたいと思っておられるようでした。善入の遺体を調べることで、即身仏だったかどうか、DNA鑑定、血液型、身長、体格等から、言い伝えられている明の王子・興膳家養子説など、判明する手がかりになると考えています。石碑拓本の解明解読もすれば、より真相に近づけると思います。隠れキリシタン寺としては長生寺の方が、大涼寺よりも、全ての条件を満たしていると考えた方がいいと、寺に残されている遺物、キリシタン祠、石碑文等、秋月藩家老であった宮崎家の墓石にキリシタン家紋が入っている等、結論を導き出せると話し合いました。長生寺の古文書も明治の廃仏毀釈の折に焼却していて現存していないとの事でした。正し、館長が『長生寺世代調査表』をご用意してくださり、それによりおおまかな隠れキリシタン寺として機能していた時代が推定できるものとおもいます。

コピー参照

『長生寺調査表』から、

興膳善入85歳の時、1600年（慶長5年12月8日）開宗、

善入示寂 124 歳、1639 年（寛永 16 年）。

初代長生寺住職開山、玖天禅良 1652 年（承応元年 8 月 12 日寂）。

二世住職、風元盛順 1664 年（寛文 4 年 6 月 16 日寂）。

三世住職、大園白道 1691 年（元禄 4 年 8 月 17 日寂）。

中浦ジュリアンが秋月で活動していた時代は、1600 年～1632 年 12 月の小倉での逮捕、1633 年 10 月 21 日、長崎西坂での殉教。まさに興膳善入が生きていた時代に相当するので、長生寺が隠れキリシタン寺として果たしていた役割は非常に大きいと考えられます。善入が寺を作った時の住職であった玖天禅良も 1652 年（承応元年）まで生きていて、確実に隠れキリシタン寺としての体系を維持していたと考えられますので、二世、風元盛順 1664 年頃までが実際に隠れキリシタン寺としての役割を担っていたのではないのでしょうか？

善入は本当に、即身仏になったのでしょうか？イエズス会報告書に出てくる善入に関する記録等から考えても、即身仏になるなど、善入らしからぬ信じられない行動ですし、そもそも熱心なキリシタンである善入が、キリスト教の教えに反する自殺である即身仏になるという矛盾した行動を取ることはありえないと思うのです。推測ですが、キリシタンとして天寿を全うした善入は、長生寺を隠れキリシタンの寺として存続させるために、自分が即身仏になったとの噂を流すことで、長生寺が信仰熱き仏寺と一般の人々に思わせるために仕組んだのではないかと思います。興膳善入が使用していた茶碗は、昭和 36～38 年頃、興膳家の方々が興膳善入の墓を掘り返した際に、色々とお棺の中から出てきた物を各自が分配されたそうです。その後行方不明になっていたものを、興膳家の方が京都の古物商から買いもどされて、長生寺に納めた茶碗であるとのこと。墓を開いたときにお棺の中から何が出てきたかの記録は残っていないとの事でした。興膳善入の遺骨は結構しっかり残っていたと聞いているとのこと、その時の写真は取っていないとの事

興膳善入の墓のある長生寺の裏山は、今は雑木林に覆われて見晴らしが悪いが、当時は善入の墓から、正面に秋月教会・レジデンシアがあった土地が望める場所であり、善入は死後も教会が望める場所を墓に選んだと思われるとのこと。（加峰館長談）

大涼寺

大涼寺に関しては、黒田長政夫人が寛永 12 年（1635 年）に死去しているので、長政夫人死後は大涼寺自体が隠れキリシタン寺として機能を果たしているとは考えにくい。しかし、長生寺の隣、黒田長政夫人が 1635 年までは生きていたので、キリシタンに対しては寛容な態度で許容していたと思われる。中浦ジュリアンの殉教が 1633 年 10 月ですので、その当時までは十分に隠れキリシタン寺として長生寺と共に機能していた可能性は高いと推察できる。大涼寺に残されていた古文書は明治初年【1868 年】の廃仏毀釈の折に焼却したとの

事。真相はつかめませんでした。大村先生のお考えのとうり、博多の黒田家由来の寺の古文書を当たられるほうが、よりキリシタンとの関係の真相解明に近づけるのではないでしょうか？

香春町採銅所不可思議寺（現・明善寺）と、 香春町中津原浦松にある・加賀山隼人、加賀山半左衛門の墓の調査報告

4月4日、月曜日、快晴、8時30分、香春町役場前に集合。元香春町教育長の村上利男先生、香春町郷土史会会長の柳井秀清先生、坪根先生、香春町学芸員・野村先生の運転・案内で、香春町のミニバスで回りました。

元光願寺

キリスト教禁令によって田川郡内における宗門改め、踏み絵が行われた場所。約二百年後の、一八二九年（文政十二）*田川郡の宗門改めの記録には、男女合わせて二八七一人（男一四八八人、女一三八三人）、像踏み申す分七九三人、像踏み申さず分二〇七八人とあり（金田手永大庄屋六角文書七八～九『年々記録』）、絵踏みをしなかった者（隠れキリシタン）の数が圧倒的に多い。いかにこの地方に隠れキリシタンが多かったかがこの記録からも分かる。細川忠興もこの事実を把握していて、次男興秋を隠すために香春町採銅所に不可思議寺を作っている。このことから、細川忠興が意識的に息子興秋と小笠原玄也一家を、隠れキリシタンの多いこの地域に隠していたことが理解できる。

* 香春町町史 第2章 小笠原時代と藩政の整備 田川郡の宗門改め 527頁～529頁
金田手永大庄屋六角文書 78～79 年々記録

田川郡役所跡、御茶屋香春藩庁跡、

曹洞宗牛頭山 高座石寺：慶長15年（1610年）、細川忠興の末弟、長岡中務孝之、香春岳城主・細川中務孝之の屋敷跡に立てられた寺。父細川幽斎の石造五輪塔が現存している。

加賀山隼人、加賀山半左衛門の墓

香春町中津原浦松地区、愛宕大権現神社、照智院下（柿下温泉近く）
浦松川に掛かる庚神橋という小さな橋があり、そのほとりに、庚神塔をはさんで二つの石祠が祠られている。左の祠（墓碑）の石の扉の右左には十字架が二つ、右の祠（墓碑）の石の扉の右左にはギリシャ十字✠が二つ、浮き彫りにされている。左の墓碑は加賀山半左衛門、右の墓碑は加賀山隼人の墓と考えられる。

加賀山氏画伝より

『少右エ門祭、八月十七八九日』とあり、墓地は『豊前国田川郡香原町加々義山八幡付近

に在り』と書かれている。

香原町とは現香春町、加々義山とは現鏡山、八幡付近とは現中津原にある鶴岡八幡神社を指していると解釈できるので、中津原浦松地区方面を指していると解釈できる。

位置関係からして香春町から採銅所は北の方角。中津原浦松地区は東の方向にある。

加賀山隼人、加賀山半左衛門の墓のある浦松地区は両側から山の稜線が落ち込んでいる山間の狭いV字の地形になった土地であり、西の稜線に沿って浦松川と呼ばれている幅 1m 位の小川が山上の湧水口から流れている。現在も 10 家ばかりが集落を作っている。

小笠原玄也時代の 1614 年当時、この浦松地区は、香春町から人里離れていて農家もほとんど無く、山間の狭い入口に見張りを置けば、出入りを簡単に監視できる場所であり、山頂には愛宕神社があり、上からの監視も可能な地形である。

おそらく、小笠原玄也一家は 1614 年秋ごろから肥後熊本に移される 1632 年 12 月までの 18 年間をこの浦松地区に監禁、監視されていたと推測される。

小笠原玄也一家は 1614 年秋頃、小倉を追放されてから直ぐにこの浦松の地に監禁されていたと思われる。小笠原玄也たちが浦松に監禁されたことは、採銅所の不可思議寺の初代住職、宗慶（行木善兵衛）には報告されなかった。暗殺【毒殺】する宗慶にキリシタンである小笠原玄也の監禁のことを知らせる必要はないからである。なぜなら、1614 年 12 月に宗慶は病気になり、次の年 1615 年 4 月 4 日に死去している。6 月 6 日、京都で細川興秋が切腹。秘密裏に採銅所の不可思議寺に連れてきて、興秋は法名を宗順と名乗り、不可思議寺二世に収まっている。1619 年 10 月 15 日、小倉で加賀山隼人処刑、同日、日出で加賀山半左衛門処刑。小笠原玄也・みやはこの浦松に監禁されていたので、この地に父・加賀山隼人、加賀山半左衛門を埋葬、ふたりの墓は初めからこの地にあり、移動していないと思われる。

明治初年【1868 年】の廃仏毀釈のとき、採銅所鈴麦の山の上から移されてきたと言われているが、二つの墓の大きさからして、明治初年の廃仏毀釈のときに採銅所鈴麦の山の上から下ろし、約 6～8 キロ南東の浦松地区に移すには相当の人数が要ったはずであり、採銅所鈴麦地区、浦松地区、両地区の古くからの地主の古老達の記憶にもその様な言い伝えがあれば覚えておられるはずだが、その様な言い伝えは聞いたことが無いと言われている。浦松地区にも明治初期の廃仏毀釈の時に水神様を採銅所から受け入れたとの記録も無く、当時は墓を移動させるということは忌み嫌われたことでもあるので、浦松地区の人々が反対したであろうことは容易に想像できる。また、明治初年の廃仏毀釈時の移動説では、慶応年間【1865～1868 年】の奥田興純の日記と矛盾する。『奥田興純は文化年間【1804 年～1817 年】に豊前の人にその墓の事を聞き』とあるので、少なくとも 1804 年～1817 年の時には墓は浦松地区にあったことがわかるし、『奥田興純自身が慶応年間【1865 年～1868 年】小倉戦争【1868 年】のとき』に浦松地区の加賀山隼人、半左衛門の墓を訪れている。

奥田興純は文化年間【1804 年～1817 年】に豊前国の人にそれらしきことを聞き、慶応年間【1868 年】小倉戦争のとき香春に出張時、上記の事を調べ日記にしている。

加賀山興純覚書よりの要約

維新戦争終了直後、熊本藩の家臣、奥田興純が香春町に出張して、香春の宿に泊まり、その夜入浴の折、風呂焚きの翁（おきな）に『あれに見える兆灯に加々見山トアルが、そうではなく加賀山ではないか』と問えば、翁は『その様にも聞いたことがある』と答えた。

『その加賀山とは我家のとなり、してその墓はあるか？』と問えば、『ある』と答えた。明朝その案内を頼む。翌朝香春の宿を立つ。昨夜の翁を見れば、その髪は整えられ、腰には差料、その訳を問えば昔神職にてありによし、翁の話によると、この墓石付近の農民が畑に肥用の汚穢物を巻くと忽（たちま）ち牛馬の祟りありとて毎年八月十五日・十六日両日生魚酒を備えると祟りなしと伝えられる。この祭りを少右エ門祭りと唱え、細川公領時、家老の人の墓なりと聞く。山畑の中に大の自然石倒れ、草木に埋もれ、石には彫刻の文字も知らず。云々。

採銅所駅前の高巢橋の袂に加々見山旅館があったが、今は空き地になっている。行木家も明善寺前にあって、代々医者をしていたとの事。（柳井郷土史会会長談）

【豊前村史の書かれた年代の特定、及びその内容の信憑性？】

もうひとつの文献は豊前村誌 8 巻中の第 5 巻、33 頁の『陵墓に関する古文書』であるが、この豊前村誌がいつの時代に書かれたのかを確認する必要がある。

『陵墓 衛門墓ト伝フ村ノ南方字鈴麦（むぎ）ニ石碑式個アリ其形常躰ナラス異容ニシテ最モ古風ヲ存ス文字ナク又年号干支其氏墓寺古記里言共ニ傳ワラス』

豊前村誌八巻中の第五巻 三三頁

『衛門墓と伝ふ村の南方鈴麦に石碑 2 個あり。』この鈴麦の地名が、上記の加賀山氏画伝の記述と相反する場所を示しているので、ひとつの問題の論点になっている。しかし現実に加賀山隼人の墓のある場所は浦松地区なので、この豊前村史の成立年代と内容の信憑性が問題視されてくる。豊前村史は、いつ編纂され、どの程度信頼できる史料なのであろうか？

【上申書の年代の特定、及び資料の出所】

さらに田川郡香春町にある奉行所の警備隊長からの城への上申書がいつの文献か、この文献に述べられている金山とはどこの金山か？ 屯所とはどこにあったのか？ を調査する必要がある。

『金山を守る衛士共、心おだやかならず、屯所真近の墓石の如き石碑式個あり、その形常躰ならず、又毎夜半奇々怪々の変あり、聞くに及ぶ所、先般細川殿この地領有の折、重臣の者故あって処断、この地に埋葬された由、ついては衛士の忠勤のため酒肴料を割増した

い』 田川郡香春町にある奉行所の警備隊長から城への上申書。

また、この上申書がいつ書かれたものなのか、どの史料から引用された物なのか、その信憑性はどの程度あるのか、を調査しなくてはならない。

【愛宕神社の創建年代・仁平 3 年 1153 年】

愛宕神社の神官が誰であったのか？小笠原玄也が監禁されていた 1614 年～1632 年までの期間、愛宕神社が細川藩にどの様に擁護されていたのか？

照智院の創建年代？と 1614 年～1632 年の間の住職の名前？

採銅所明善寺

明善寺片山御住職には残念ながらお会いすることができなかったが、奥様が御親切に対応してくださり心から感謝申し上げます。御住職奥様から『永代録』の由緒沿革をコピーしていただき、『永代録』の必要な創生初期の箇所をデジタルカメラにて記録を撮らせていただいた。

『永代録』による

- 1、慶長 15 年【1605 年】草創、開基雪木善兵衛となっている。雪木と行木との表記の違い。
- 2、行木（いくき）とは読まず、「ぎょうき和尚」と地元では呼んでいる。
- 3、初代住職・雪木善兵衛の法名は宗慶であり、宗順ではなかった。
- 4、初代住職（第一世）宗慶は慶長 19 年（1614 年）12 月より病気を生じ、元和元年（1615 年）4 月 4 日に 71 歳にて寂定（往定・死去）している。
- 5、第二世、宗順、以下不明【細川興秋】
- 6、第三世、慶順、以下不明【現明善寺住職、片山家の初代】

＊ 香春町町史 第一章 神社・寺院 723～724 頁 明善寺には
1634 年（寛永 11 年）8 月 7 日 香春町採銅所の不可思議寺、慶順の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号する。

【不可思議寺は細川藩が 1632 年（寛永 9 年）12 月に肥後に移った後、1634 年（寛永 11 年）8 月 7 日、慶順の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号した。】

【第 1 の疑問点】

宗順和尚とはだれか？

不可思議寺、第二世、宗順の時代は、この『永代録』と香春町史から計算すると、1615 年～1632 年（元和元年～寛永 9 年）12 月までの 18 年間となる。

この論考では不可思議寺第二世住職・宗順は、細川興秋の法名であることを前提に論考を

展開する。1615 年は大坂夏の陣が終了して、6 月 6 日細川興秋が京都で切腹させられた年。1632 年（寛永 9 年）12 月は、豊前細川藩が肥後熊本に移封になって、小倉を去った年。

【第 2 の疑問点】

【初代住職、宗慶の病死について】

慶長 19 年（1614 年）10 月 6 日、細川興秋【29 歳】は米田是季と共に大阪城に入城。12 月 21 日和睦成立。

不可思議寺初代住職宗慶の 12 月発病は、大坂冬の陣が終わった時期と重なり、豊臣側の敗北がおおよそ細川忠興には読めた時期と重なる。宗慶の死去、4 月 4 日は、細川軍が大坂の夏の陣に参戦するために 4 月 28 日、小倉を出発する前に当たる。

細川忠興は小倉出発前に、採銅所の初代住職宗慶を暗殺（毒殺）という形で取り除き、次の不可思議寺の住職に興秋を迎えるための準備をして、大坂夏の陣に向かったのではないだろうか？

5 月 10 日、大阪城落城。細川忠興は大坂城落城とともに興秋の安否を必死に確かめたであろう。興秋を大阪城から何としても助け出したいために、米田是季に命じて、米田是季が興秋の警護をして守り抜き、興秋を大阪城陥落の時に無事に落ち延びさせ、細川方に引き渡したと思われる。戦いに敗れた後、興秋は京都の伏見稲荷の東林院に潜伏した。東林院は細川家家老松井家の寺である。興秋の伏見の屋敷に残された妻子を守るために松井右近等一部の側近を護衛に派遣して、興秋の潜伏先が掴めると身柄を保護したと考えられる。何としても死なせてはならなかった。しかし告訴する者があり、潜伏先で捕らえられた。徳川家康は、興秋は死罪に値するが、父忠興のこれまでの徳川家に対する忠義と功労に報いるため、興秋の罪を免じようとしたが、成り行きによっては細川家の知行減、最悪の場合、御家取り潰しまで発展しないとも限らなかった。

細川家の生存と存続をはかるため、忠興は愛する息子、興秋に切腹を命じ、6 月 6 日、京都、東林院において興秋【30 歳】は切腹した。興秋の遺体は京都伏見の稲荷山の南谷に埋葬された。法名黄梅院真月宗心。興秋亡き後、残された妻・氏家宗入の娘は忠興が引き取って嫁がせ、娘鍋は細川家で養育している。しかし、不思議なことに、興秋の墓は残されていない。興秋が切腹した東林院も京都伏見稲荷には存在しない。忠興は興秋を採銅所の不可思議寺に匿うためにあらゆる手を尽くしたと思われる。

【推論】

【家伝・池田家文書】には（興秋は尾州春日部郡小田井村に暫らく忍び後、肥後国天草御領村に隠棲とある）

興秋を切腹させたと見せかけて、おそらく 6 月中に人目につかないように京都から豊前小倉まで船に載せて連れてこさせ、すでに 5 年前の興秋出奔のときに豊前国田川郡香春町採

銅所に作っていた不可思議寺に匿わせた。

しかし不可思議寺には初代の住職・宗慶（行木善兵衛）がおり、宗慶は熱心な仏教徒なので、キリシタンである興秋を匿うには、宗慶和尚から秘密が漏れる危険性が余りにも大きかった。それゆえ最初から興秋を住職として不可思議寺に匿うには、宗慶の存在が大きな障害となった。つまり、興秋を第二代住職にするために初代住職宗慶は暗殺されたのではなかろうか？1614年12月から、毒を盛り始め、1615年4月4日に殺害に及んだと考える。宗慶を取り除くことにより、これで不可思議寺には何の障害も無く興秋を第二代住職として迎え入れ、誰にも秘密のからくりが漏れずに不可思議寺は隠れキリシタン寺として機能することができた。二世住職宗順【細川興秋】にさえ、初代宗慶の暗殺は秘密にされたであろう。

1618年 ？月【元和4年】中浦ジュリアン神父【50歳】、香春町採銅所鈴麦の不可思議寺に興秋【33歳】住職宗順と浦松に監禁されている小笠原玄也を訪問。中浦ジュリアン神父、逮捕を免れて不可思議寺の住職宗順【興秋】に匿われて、不可思議寺に宿泊する。

＊（1618年イエズス会年報記録 クリストファン・フェレイラ神父報告による）

『天正少年使節の中浦ジュリアン』 結城了悟著 101～102頁

大坂の陣から4年後の1618年（元和四年）と、6年後の1620年（元和六年）のイエズス会年報報告のなかの小笠原玄也の記録に混ざって、細川興秋が記録されている。

1618年年報【元和四年】イエズス会年報

『いま具体的に述べるが、信仰のために追放されたキリシタンの中に殉教者ディオゴ加賀山隼人の娘婿【小笠原玄也】とその妻及び八人の子供がいる。彼らは豊前の領主、長岡越中殿【細川忠興】によって、数名の貧しい農民だけがすんでいる人里離れた土地【香春町中津原浦松】に追放され、その土地から出ることはおろか居住する家からも出ないように監視されている。【細川興秋 33歳は】その高い身分やキリスト教徒としての徳から言って、これを訪ねて慰めるに相応しい人物であるから、大きな危険を犯して神父【中浦ジュリアン神父 50歳】がそこ【香春町採銅所鈴麦】に行ったが、泊めてくれた仏僧の助けがなかったならば発見され捕らえられるところであった。この仏僧【採銅所不可思議寺、住職宗順・細川興秋】は信仰の敵であり、神父が何者であるか知っていたにもかかわらず、徳の高い人であったから、その客が発見され捕らえられることがないようにしてくれた。それで神の特別な御摂理によって危険から逃れることができた。また同じく神の御心によって神父が企図した目的も都合よく運ばずにはいなかった。』

＊（1618年イエズス会年報記録 クリストファン・フェレイラ神父報告による）

『天正少年使節の中浦ジュリアン』 結城了悟著 101～102頁

1620 年年報【元和六年】イエズス会年報

ロドリゲス・ジーラム神父報告

『【細川興秋 35 歳は】かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で、衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々が目を向けしめしものなるが、今や綴れて垢づき破れ下がったぼろをまとい、下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級の一人でもあるかの如く、自ら身を下ろして衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父【中浦ジュリアン神父 52 歳】はこの人【細川興秋】が故里にあって豊かな生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるのを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと、堅い決心をしているのを見出した。』

* 『16・17 世紀イエズス会日本報告集』 第二期 第 3 巻 95～96 頁 筑後・豊後国

【推論】

小笠原玄也の知行高は細川忠興の小姓であったから 600 石である。小姓が高い身分かというとして高くはなく、まして、富、権威、大名のごとき身分でもなく、供回りも多くはない。おそらくこの記述表現は別の人物のことを表して、細川家においてキリシタンであり『大名の如き身分』の人とは次男の細川興秋以外に考えられない。

細川興秋は 1615 年（元和元年）6 月 6 日以降、京都伏見の東林院で切腹させたと見せかけ、実は秘密裏に京都より豊前国田川郡香春町採銅所にある不可思議寺に連れてこられ、住職宗順になり済まして、叔父細川中務孝之の保護下にいたと考えられる。

細川家の嫡子である興秋はキリシタンゆえに『かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々に目を向けしめし者』であったが、『この名門に生まれて楽しい日を送ってきた士が、晴々として財産や故郷を捨てて現在の境涯を選んだ』人だった。

『しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。私たちは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである。』

ピリピ人への手紙 3 章 7 節～9 節

キリストのゆえに、すべてを失った細川興秋と小笠原玄也。それらのものを、ふん土のように思い、日々の糧を得るために、最下級の仕事も厭わず、聖貧のなかに慎ましく暮らす興秋と玄也とみやの姿は、同じキリシタンである不可思議寺の住職宗順・興秋の目にどのように映っただろうか？

『寂しい片田舎に名もない百姓、領内のやくざ者の間に追放され・・・今や綴れて（つづれ）垢づき破れ下がったぼろをまとい下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級のひとりでもあるかの如く、自ら身を下して衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父はこの人が故里にあって豊かな生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと堅い決心をしているのを見いだした。』

＊『16・17世紀イエズス会日本報告集』 第2期 第3巻 96頁 同朋舎

『晴々として財産や故郷を捨てて現在の境涯を選び、今や極貧の人達の間交って、百姓の姿（蓑を着ていた）をして、その日その日の糧を得んがために賤しい労働に従っているのは、感動すべき光景であった。』

＊『日本切支丹宗門史』 下巻 レオン・パジェス著 第5章 133頁

【推測】

1618年の豊前訪問のとき、中浦ジュリアン神父【50歳】が香春町採銅所鈴麦の不可思議寺の住職になっている細川興秋【33歳】を訪ねたことと、浦松に監禁されている小笠原玄也を訪ねたことはイエズス会年報により報告されているので証明される。

1614年5月初旬、中浦ジュリアン神父は危険を犯して小倉城二の丸の加賀山隼人宅に軟禁されている小笠原玄也一家を訪ねて後、小笠原玄也は1614年10月以前に小倉から追放されて香春町中津原浦松の農家に監禁されていた。1615年7月以後、興秋が採銅所の不可思議寺の住職の宗順として生きている情報を中浦ジュリアン神父は豊前のキリシタン組織から1618年の筑前豊前地方巡回前の時点で入手していて、中津原浦松の農家に監禁されている小笠原玄也一家と、採銅所の不可思議寺の住職となっている興秋のことを知ったうえで訪問したと思われる。

当時、中浦ジュリアン神父は島原口之津に居を構えていて、島原、天草、八代地区を司牧宣教していた。興秋の側室【妾】嫡子興吉の匿われている天草佐伊津村は島原口之津からは早崎瀬戸を挟んだ対岸にあり、鬼池、御領、佐伊津は確固としたキリシタン組織の存在した地区だった。前年の1617年8月29日付けでコーロス徴収文書の中浦ジュリアン神父は作成している。これらの文献に記載されている状況証拠を付け合せて見ると、中浦ジュリアン神父は佐伊津にいる興秋の側室と息子興吉の存在をすでによく知っていて、1618年、採銅所不可思議寺訪問のとき、興秋に天草佐伊津の側室と息子興吉の消息を伝えた。帰りには興秋の手紙なりを預かり元気であることを興秋の側室に伝えた。それ以来中浦ジュリアン神父が採銅所不可思議寺を訪問するときは、興秋と側室は互いの消息を確かめ合い、中浦ジュリアン神父を仲立ちとして連絡を取り合っていたと推測される。

しばらくして後、小笠原玄也は 4 年に渡る監禁生活から解放されて、中津原浦松において農業に従事する。解放後、玄也は近くの不可思議寺の住職になっている細川興秋と面会、以後、興秋と玄也は救癪活動や貧困救済活動を田川地方のキリシタン組織の人々と共にしたとおもわれる。

＊ イエズス会 1620 年年報ロドリゲス・ジーラム神父報告

『16・17 世紀イエズス会日本報告集』 第二期 第二巻 95～96 頁

1613 年（慶長十八）6 月 4 日、キリシタン禁令が発布され、全国でキリシタン狩りが始まった。迫害を逃れ、追放された貧しいキリシタン達は山の奥深くに逃げ込んだ。徳川家康が全国の新金山保護のために定めた法律、『御山例五十三条之事』があり、そこには一種の治外法権が認められていたため、貧しいキリシタン達にとっては、山深き地は信仰を守りながら貧しくても生活できる安住の場所であった。昔【奈良時代】から銅や金が採掘できた田川郡香春町採銅所付近も、豊前、豊後、筑前、筑後のキリシタン達の格好の隠れ家だった。採銅所は呼野・企救郡（きくのこうり）に接していて、このあたりから田川周辺にかけて当時キリシタンが約 3000 人いたと記録に残されている。

細川忠興もこの地方に 3000 人からのキリシタンが住んでいる事実を把握していて、次男興秋を隠すために香春町採銅所に不可思議寺を作っている。このことから、細川忠興が意図的に息子興秋と小笠原玄也一家を、隠れキリシタンの多いこの地域を選んで隠していたことが理解できる。

香春町光願寺で行われていた宗門改め、踏み絵の記録

約 200 年後の、*1829 年（文政十二年）田川郡の宗門改めの記録には、男女合わせて 2871 人（男 1488 人、女 1383 人）、像踏み申す分 793 人、像踏み申さず分 2078 人とあり（*金田手永大庄屋六角文書 78～79 頁『年々記録』）、絵踏みをしなかった者（隠れキリシタン）の数が圧倒的に多い。いかにこの地方に隠れキリシタンが多いかがこの記録からも分かる。

＊ 香春町町史 田川郡の宗門改め 527～529 頁、

＊ 香春町町史 金田手永大庄屋六角文書 78～79 頁『年々記録』

【第 3 の疑問点】

【初代不可思議寺の位置の確認と遺構の発掘】

明善寺は聖徳 3 年（1713 年）2 月 6 日、堂宇類焼、安永 9 年（1780 年）8 月 26 日、

第 9 代住職円瑞、本堂再建する。＊香春町町史 第 8 編 宗教編 724 頁

片山住職の奥様の話では、昔、初代不可思議寺は、今の明善寺の川向こう、片山地区にあったと言われているとの事、1713 年の火災で全焼したので、現在の採銅所駅近くに新しく土地をもらい 1780 年、第 9 代住職円瑞和尚の時、再建したとの事。

片山地区は現採銅所郵便局から東の地区であり、香春町学芸員野村先生によるとその地区に、不可思議寺のあった遺構らしきものは現時点では、確認できていないとの事。

初代不可思議寺の場所の特定と、遺構の発見、不可思議寺の大きさ、建物の配置の確認など、発掘調査を御願いしたい。